

万年筆の旅

Vol. 18



巻頭コラム

—残されたシナリオ「破獄」のこと—

池田 太郎

吉村昭「漂流記の魅力」ゆかりの資料館紹介

奥松島縄文村歴史資料館について

菅原弘樹(奥松島縄文村歴史資料館館長)

CONTENTS



- 令和3年企画展開催報告
「吉村昭と東日本大震災～未来へ伝えたい、災害の記録と人びとの声～」
- トピック展示開催報告第15回「津村節子「花がたみ」—越前和紙の魅力—」
- トピック展示開催報告第16回「残されたシナリオ—未完・熊井啓監督版「破獄」を中心に—」
- おしどり文学館協定記念朗読会 津田寛治「天狗争乱」を読む
- 吉村昭・津村節子ゆかりの人～作品紹介 将基面誠『無医村に花は微笑む』(初版)

残されたシナリオ「破獄」のこと 池田太郎

2002年某日、近・現代の日本の歴史的事実を描いて比類のない小説家吉村昭氏を、近・現代の日本人を劇映画で撮り続け、世界的な評価を得た映画監督の熊井啓氏が吉祥寺のご自宅へ訪ね、吉村氏の作品「破獄」の映画化に許諾を求めた。

その後かどうか、記憶が曖昧だが、熊井さんから私に電話があった。

「タロさん！ 吉村昭さんの「破獄」、網走で撮れる！」

喜びの声だった。旧網走監獄が博物館となって網走に残っている！（あそこで撮れば制作可能だ！）

映画は常に膨大な予算を必要とする。半信半疑だったが、早速原作を読んだ。2月9日、熊井さんのお宅で脚本化の依頼があり、私としては珍しく早く3月末には初稿を送った。

以来、シナリオは熊井さんと私の間で改稿される度、吉村氏へ。その感想が吉村氏から監督へ。それは常に真情溢れる共感と励ましであった（熊井夫人明子氏著『めぐりあい』春秋社刊に詳しい）。

しかし、制作は様々な制作側の意向によって難航し、そうこうするうちに思いがけなくも2006年、突然吉村氏ご逝去の報！

熊井さんに深い衝撃が走った。

だが熊井さんは諦めず最大の努力を傾けた。そして翌2007年、「破獄」の制作は渡辺謙氏の主演で実現へ向かう、と思われた（元石原プロ石野憲助プロデューサー談）。

だがそれを石野氏が告げた翌日熊井氏も又倒れ（クモ膜下出血）、急逝されたのである。

葬儀には、熊井作品「ひかりごけ」で一緒に録音の紅谷愼一氏と私が参列、ひっそりで行われた。

熊井氏が倒れた時持っていたバッグには、印刷されたシナリオ第七稿へさらに熊井氏が鉛筆で書き直し、加えたものが残っていた。

十一年後、それを私が読み解いて第八稿とし、「月刊シナリオ」（日本シナリオ作家協会）2018年12月号に未映画化シナリオ「破獄」として発表させて頂いた。

其処には熊井夫人明子氏も寄稿され、吉村昭氏の熊井氏宛書簡のコピーも載っていて、映画「破獄」のラストはハッピーエンドではない、それが潔い、という吉村氏と熊井さんの一致（私も！）も残っている。

無論、シナリオ「破獄」第七稿迄にも、予算の関係からか消えたシークエンスがあったことも付け加えておきたい。

吉村昭記念文学館からのご質問に、何故このシナリオを共作者の私がそんなに後になって公表したのか？ というものがあった。

熊井監督逝去の後、熊井明子氏から、某監督とプロデューサーが「破獄」のごとお話ししたい、と電話があったので貴方の電話番号を伝えました、という連絡を頂いた。確かにその後、私へ電話は来たのですが、先方が何を求めているのか、全く要領を得なかったのです。以後、他の監督が版權を得た、という噂もあり、シナリオ「破獄」の第八稿を公表すれば、こつちが本家、と意に添わぬ主張をする事にもなりかねない。

映画「忍ぶ川」以来私は、熊井さんが「潔い」という言葉を大事にする人だ、と思っていました。

「サンダカン八番娼館・望郷」の田中絹代さんの演技、「式部物語」の香川京子さんのラスト、最高傑作「千利休本覺坊遺文」の萬屋錦之助さん演ずる「手刀切腹」のこと、そして黒澤明監督執筆の脚本で撮った熊井啓監督の「海は見ている」の清水美沙演ずる岡場所の女のラスト「いっそ気持ちいい……」。

シナリオ「破獄」をこのままにしたら日本映画の損失では……と気付いた時、十一年が経っていたのです。

「破獄」の脱獄王佐久間は、あの無謀な大戦争の後に来た大変化、日本人の

「潔さ」を生きたのです。それは主人公が、この人生で出会うべき人と出会えた後を描くことになる。

「敗戦」という、今でも日本人が忘れてしまいたい体験から、「潔さ」は生まれた、と描くのです。それを吉村さんと熊井さんは目指すことで一致した！ そう僕は思うんです。

吉村氏の生年は昭和2年。熊井氏は昭和5年。同じ時代を生きたんです。昭和4年、世界恐慌が日本を襲った。すると6年、石原莞爾は満州事変を起し、12年には陸軍全体が日支事変を起す。泥沼の日中戦争が16年、日米開戦へ発展する。20年、日本は敗戦した。

この大戦争の裏で内地の監獄で国家と戦っていたのが「破獄」の主人公佐久間。我が子にキャラメル一つ盗ろうとして捕まりかけ、逆に相手を殺してしまい、無期刑に。

戦時下の監獄も戦争だった。刑務官が同じ日本人を虫けらとして扱う。俺を人間扱いしろ！ 佐久間は戦いを挑み、脱獄王になった。

この構造が日本の「敗戦」で、破算、逆転され、人間と人間の関係を見直すに至る人も出て来た。刑務所長の鈴江です。歴史の生んだ奇跡のような事実でした。

これを吉村昭氏と熊井啓氏は描こうとし、道半ばに倒れた。この道半ばは尊い半ばです。（脚本家）

「残されたシナリオー未完・熊井啓監督版『破獄』を中心に」

会期：令和3年12月17日(金)
 ～令和4年3月16日(水)

昭和58年(1983年)に出版された小説『破獄』は、脱獄囚と看守の緊迫した闘いと、戦中戦後混乱期の刑務所の実態を描いた作品として高い評価を得ており、これまで2度ドラマ化がされています。

今回、作家や映画監督が映像化を試みるも、未完に終わった映画『破獄』の残されたシナリオに焦点を当てた展示を開催しました。「社会派」映画監督として名高い熊井啓氏が、映画化に向けて力を注いだシナリオを取り上げました。

熊井啓と吉村昭の交流について

昭和5年、長野県豊科町大字豊科(現安曇野市豊科)で生まれた熊井啓は、「帝銀事件 死刑囚」でデビューし、以



『破獄』
 (昭和58年 岩波書店)

後「日本列島」「日本の黒い夏―冤罪―」といった真実を告発する作品を発表し、「社会派」監督と称され、日本のみならず世界的にも著名な映画監督です。平成14年(2002年)、小説『破獄』について映画化の許諾を得るため、熊井はかねてから敬愛していた吉村と初めて面談をしました。ジャンルは違えども、仕事に取り組む姿勢など互いに共感し、吉村は映画化を承諾しました。その後、熊井は修正を加えたシナリオを送り続け、吉村は書簡で感想を送りました。「破獄」という作品を軸に、シナリオと書簡が行き来し、作品に深みが増していくように二人の交流も続けられました。

そんな矢先、平成18年7月に吉村は永眠します。

訃報に大変なショックを受けた熊井も、平成19年5月に帰らぬ人となりました。熊井が最後に携えていたカバンには、「破獄」のシナリオ第七稿が入っていました。

今回の展示では、熊井が映画化に向けて力を注ぎ、最後に携えていた第七稿(ラスト稿)を含むシナリオ全11冊を

公開しました。また、吉村が熊井に送った書簡も同時に展示しました。二人のやり取りからは、シナリオが徐々に完成していく経緯が読み取れます。ご来館いただいた方に、熊井がシナリオに手を入れた加筆や修正部分を、手に取って見ていただける、第七稿(ラスト稿)の複製版を作成しました。映画人の、映画化に懸ける思いを読み取っていただけたのではないのでしょうか。



熊井と脚本家池田太郎が共同で仕上げた『破獄』のシナリオ
 上段左より「シネ・ストーリー」「準備稿」「初稿」「初稿原稿」「準決定稿」「決定稿2」*/下段左より「第六稿」「第六(七)稿」「第七稿」「第七稿(ラスト稿)」
 上記に第八稿を加えた全11冊を期間限定で公開した。
 (*は津村節子氏寄託資料、他は熊井明子氏蔵)

熊井版以外にも『破獄』の映画化は試みられました。作家・長部日出雄が脚

色したシナリオや、映画監督・行定勲による『破獄』準備稿・検討稿の資料を展示しました。

その他、吉村昭の『破獄』が、博物館網走監獄の企画展「網走刑務所と文学二」(令和3年)で取り上げられた様子を紹介しました。

今回のトピック展示に際し、熊井啓監督夫人の熊井明子氏より多数の資料を快くご提供頂きました。心より御礼申し上げます。(学芸員 篠田敦子)

学芸員ノート5

インタビュー「特集テレビドラマ/作家が見たテレビドラマ」で、吉村は次のように語っています。

「破獄」の映像化について、厳密に言えば最初に申込みに類するものをうけたのは、俳優の緒形拳氏からであった。(中略)夜、氏と酒を飲んでいる時、私が『破獄』を連載中だということを口にする、「その主人公をやらせて下さい。約束しますよ」と、氏は言った。

(「新放送文化」NO.4 昭和61年)

NHKドラマ「破獄」(昭和60年)はこうしたいきさつを経て生まれたそうです。なるほど、緒形拳演じる佐久間の、鬼気迫る演技には、納得の感があります。

緒形拳と吉村はプライベートでも交流を深めました。緒形は吉村原作の映画「魚影の群れ」(昭和58年、松竹)、ドラマ「動く壁」(平成6年、フジTV)で主演を務めています。

津村節子「花がたみ」

―越前和紙の魅力―

会期：令和3年9月17日(金)

～12月15日(水)

当館と福井県ふるさと文学館は、平成29年(2017年)に「おしどり文学館協定」を締結し、文学館同士の連携事業をおこなっています。

小説家津村節子は、昭和3年(1928年)に福井県福井市佐佳枝中町(現福井市順化)で3人姉妹の次女として生まれました。10歳の時に東京に転居しましたが、福井を離れた後も故郷を見つめ続け、困難に直面しながらも自らの道を切り開く女性たちを描いています。この度の展示では津村が福井を描いた「炎の舞い」「遅咲きの梅」「白百合の崖」「花がたみ」「絹扇」の5作品の中から、福井県今立地区の紙漉き業を営む家に生まれた女性を主人公とした「花がたみ」を取り上げました。



【花がたみ】
平成4年 中央公論社

越前和紙との出会い

昭和28年に吉村昭と結婚した津村は、同40年に「玩具」で芥川賞を受賞します。受賞後福井県立図書館から講演を依頼されたことをきっかけに、早くに亡くした両親の思い出が胸に迫るため、足が遠のいていた福井の地を訪れました。

講演がおこなわれたのは和紙の里、今立郡今立町(現越前市今立地区)で、その折1500年の歴史を持つ越前手漉和紙の工場を見学します。「原料の選択吟味から始まり、根気のいる多くの工程を経て、初めて繭のような優雅な光沢と、あたたかい手触りと、優れた耐久性に富む、世界に類のない紙が出来上がるのを、私は目のあたりにしたのだ」と※と初めて紙漉きを目にした時のことを記しています。思いがけず郷里の歴史の厚みに触れた津村は、講演以降福井を訪ねるようになります。焼き物や織物などにも触れていきますが、その第一歩が越前和紙でした。

「花がたみ」の執筆

平成2年、津村は「花がたみ」の連載を開始しました。越前の紙漉きの家に

生まれた主人公綾乃の恋と友情、家族の絆を描いた作品です。家を出て東京で暮らし、再び福井へ帰郷する綾乃の心情に寄り添うように描かれています。題名は越前を舞台にした謡曲「花筐」から付けられました。

津村は昭和40年に初めて紙漉きを目にしてから、越前和紙との関わりを深めていきました。厳しい寒さの中で白い息を吐きながら漉き舟の中で漉桁を動かしている女性たちや、紙の原料の不純物を丹念に取り除く作業を一日中続けている年配の女性たちに出会います。そして取材を続ける中で、いつか小説に書きたいと思うようになっていきました。

執筆が決まった際には、再び福井を訪れ取材を行いました。作品には、九頭竜ダムの建設で水没した大野郡和泉村(現大野市和泉地区)をはじめ、今立にある紙の神である川上御前を祭る岡太神社、大瀧神社、花筐公園の薄墨桜など、様々な場所が登場します。また、取材した越前和紙職人の岩野市兵衛や画家の平山郁夫は、作品に登場する人物のモデルとなっています。

福井県ふるさと文学館より自筆原稿「花がたみ」(複製)(現資料・越前市今立図書館蔵)をはじめ、4種類の越前和紙をお借りしました。越前和紙の展示エリアでは、特有の紙質を間近でご覧いただくのと同時に、越前和紙を使用した職員手作りの葉を配布しました。



越前和紙 福井県ふるさと文学館蔵
左から、①越前生漉き奉書、②雲肌麻紙、③檀紙、④MO水彩画用紙。①の紙を漉いた岩野市兵衛は「花がたみ」に登場する「岡野徳兵衛」のモデル。

また津村と吉村が愛用する越前和紙製の名刺も紹介しました。共に肩書きもなく、姓名と住所、電話番号のみが記されたシンプルなもので、裏面にも記載はありません。吉村が取材の際によく使用していたものです。

展示期間中は、越前和紙の製作過程や職人の高い技術力などを解説した映像「越前和紙 産地が受け継ぐ技と美」(企画・著作：越前生漉鳥の子紙保存会)を、福井県の卯立の工芸館よりお借りし放映しました。

(学芸員 北山ゆかり)

津田寛治

「天狗争乱」を読む

福井県ふるさと文学館では、特集展示「吉村昭と天狗党」(会期…令和3年10月1日～12月22日)を開催し、吉村昭「天狗争乱」を中心に紹介しました。また、おしどり文学館協定記念朗読会として、11月7日に、NHK大河ドラマ「青天を衝け」で武田耕雲齋を演じた津田寛治氏(俳優)による朗読会を開催しました。福井県出身の津田氏は、「天狗争乱」を読み込んで武田耕雲齋の役作りをされたそうです。当館では、その朗読会のライブ映像をゆいの森ホールで上映しました。

ご来場のお客様には、福井県ふるさと



(上) マスクケースと葉 吉村昭記念文学館
(下) 「天狗争乱」メモ帳 福井県ふるさと文学館

と文学館より「天狗争乱」の自筆原稿をイメージしたメモ帳、当館より越前和紙で製作したマスクケースと葉をプレゼントしました。葉には「花がたみ」のクライマックスで登場する越前市花筐公園の薄墨桜を描いています。

ご来場いただいたお客様から「津田さんの熱意あふれる朗読に魅了され引き込まれました」というご感想をいただきました。たくさんのお客様にご参加いただき誠にありがとうございました。今後も両館で様々な事業に取り組んで参ります。

計報

瀬戸内寂聴氏

恋愛や歴史、老いなどを題材に人間の本質を描く作品を数多く残し、作家、僧侶としても活躍された瀬戸内寂聴氏が令和3年11月9日にご逝去されました。

吉村昭・津村節子夫妻と親交が深く、区が作る吉村昭関連証言映像へのご出演、当館常設展示図録へのご寄稿や、展示資料の貸出などを通じ、吉村・津村文学の魅力を広げ発信いただきました。また、当館友の会の発起人をはじめ、福井県ふるさと文学館とのおしどり文学館協定をご提案いただくなど、区の文化振興に多大なるご尽力をいただきました。

ここに、これまでの瀬戸内寂聴氏のご功績に敬意と感謝を申し上げ、衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

吉村昭・津村節子ゆかりの人々作品紹介

将基面識

『無医村に花は微笑む』(初版)



平成14年ごま書房 福島茂喜氏蔵

この作品は、医師の将基面識氏が、昭和57年(1982)から19年間、無医村だった岩手県下閉伊郡田野畑村で、村医を務めた体験を記した自伝です。村民との温かい心の交流、村に赴任してから7年後に逝去した妻の春代氏と、家族への思い、地域医療に対する考えや、吉村昭・津村節子夫妻との村での親交についても記されています。吉村の序文ですががすがしい読後感も掲載されています。

将基面識氏は、昭和11年、満州関東局の役人をしていた父の赴任地、旅順で生まれました。終戦後の同21年、平壤の収容所生活で、幼い妹を病で亡くした体験と、医療を受けられず、息絶えた人びとの姿は、「医者がいれば助かったのに」という思いと共に心に刻まれ、医師を志す動機となりました。また、無医村で医療に打ち込む道を目指す原点となりました。

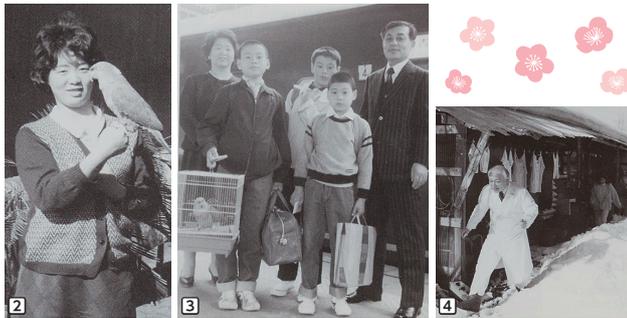
吉村昭「梅の蕾」と「花笑みの村基金」

将基面識氏の妻、春代氏は、花が少ない田野畑村に梅の苗を根付かせる活動に取り組み、村民と親交を深めました。骨髄異形成症候群により46歳で逝去しました。吉村は、将基面識夫妻と村民との間に生まれた深い心の結びつきを短篇「梅の蕾」(『遠い幻影

平成10年文藝春秋で描いています。

平成8年(1996)、保健文化賞を受賞した将基面識氏は、賞金を村に寄付しました。春代氏の思いを受け継ぎ、村を花でいっぱいにするのを目的としています。津村は「花笑みの村」(合わせ鏡平成11年朝日新聞社)や、数々の随筆に将基面識氏との思い出を記しています。

今回紹介の初版は、本書を編集した福島茂喜氏からお借りしました。初版には右上と左を含む12点の写真が掲載されています。また、吉村の「梅の蕾」を読み、感銘を受けた版元の社員と福島氏が、将基面識氏との和やかな「交歓会」を重ね、本書が刊行される経緯も記されています。これらは、新装版平成18年ごま書房新社(全八章)には収録されていないため、初版(全十章)のみで知ることが出来る貴重な資料でもあります。(学芸員 深見美希)



(右上・①)妻の春代氏が願った「花笑みの村」構想の基、植樹された梅の花を見つめる将基面識氏。(上・②)将基面識氏の妻、春代氏。可愛がっていた黄帽子インコを連れて結婚した当時(昭和40年、22才頃)。(③)昭和57年4月7日、田野畑村への赴任が決まり、上野駅から出発する一家5人。診療所医師住宅まで当時は15時間以上かかった。右から、将基面識氏(45才)、三男(小5)、長男(中2)、次男(小6)、春代氏(39才)。(④)平成10年頃。田野畑村の往診先で。1メートル近い雪を踏み分け、四駆車を使用し、高齢の患者に往診する。(『無医村に花は微笑む』初版より)

令和3年度企画展図録に将基面識氏の寄稿「吉村昭先生との不思議なご縁」と関連資料収録。詳細は、7ページをご覧ください。

※この作品は初版、新装版共に、ゆいの森あらかわ3階に配架しています。

吉村昭と東日本大震災 〈未来へ伝えたい、 災害の記録と人びとの声〉

会期：令和3年10月16日(土)～
12月15日(水)

平成23年(2011)3月11日の東日本大震災発生時に広く注目を集め、以降、増刷を重ねる吉村昭著作『海の壁』(昭和45年中公文庫、後改題『三陸海岸大津波』昭和59年中公文庫、平成16年文春文庫)と『関東大震災』(昭和48年文藝春秋)を中心とする資料全83点を紹介しました。体験者への綿密な取材と膨大な文献資料の調査に基づき、明治29年、昭和8年、同35年に三陸沿岸を襲った大津波の実態と、大正12年の関東大震災による被害を克明に記したこの2作は、過去の災害に学ぶべき教訓を後世に伝えていきます。東日本大震災発生から10年を経て、改めて、吉村作品が伝える災害の実態と人びとの営み、防災に関するメッセージをたどりしました。ここでは、展示資料の一部を紹介します。



展示を鑑賞された津村節子氏と吉村司氏(吉村昭・津村節子氏長男)。
令和3年11月23日 写真提供 吉村司氏

体験者の証言と災害の記録

展示前半では、主に作品成立過程をたどりまし。災害を伝える体験者の声として、明治29年、昭和8年の津波(全18ページ)と関東大震災(全19ページ)の証言を丹念に書き留めた吉村の取材ノートを展示しました。田野畑村(岩手県)の羅賓に50mの大津波が来襲したという明治29年の津波の前兆や、昭和8年の津波による宮古市田老の被害、関東大震災の火災被害など、ノートに記された証言の詳細をパネルで拡大して紹介し、作品本文との対応をご覧いただきました。執筆時の文献資料では、『風俗画報』臨時増刊『大海嘯被害録』上・中・下巻(明治29年7月～8月、東陽堂(公財)特別区協議会蔵)や、『田老村津浪誌』(田老尋常高等小学校編、昭和9年)他、岩手県で調査した津波の記録(岩手県立図書館蔵、初公開の吉村蔵書『震災予防調査会報告』全七巻、震災予防調査会編、大正14年)同15年、岩波書店(津村節子氏寄託資料)などを展示しました。

東日本大震災以後、吉村作品再読
―田野畑村、宮古市田老、石巻市、東松島市―
東日本大震災の発生は、吉村がこの



【写真】「太十郎の上着」(奥松島縄文村歴史資料館蔵)を展示。吉村は『漂流記の魅力』で上着を調査した際に撮影した写真を紹介している。

世を去ってから5年後のことでした。展示後半では、どのように作品が再読されたのかを、三陸ゆかりの地の資料と共に、ご覧いただきました。最初に、津村節子が、大震災発生後に相次いだ取材に対応し、『三陸海岸大津波』を「警告の書」として、広く伝えたことを紹介しました。津村は、大震災発生翌年、短篇「星への旅」の舞台地で、吉村が津波に関心をもつきっかけとなった夫婦共にゆかりの深い田野畑村と、宮古市田老の防波堤を訪ね、『三陸の海』(平成25年、講談社)著しました。自筆原稿(津村節子氏蔵)や、取材時の写真(津村節子氏蔵・吉村司氏撮影など)を展示し、作家夫婦の三陸沿岸に対する思いをたどりまし。

宮古市田老からは、吉村が「三陸海岸大津波」に「子供の眼」として収録した、田老尋常高等小学校の児童による昭和8年の津波を綴った作文(田老村津浪誌)を取り上げまし。吉村が、作文「津波」を書いた荒谷(旧姓牧野)アイを、昭和45年頃に取材し、『三陸海岸大津波』に記した避難の心構えや、荒谷が生涯、命の大切さを伝え続けた活動などを、四女の荒谷栄子氏が所蔵する資料から紹介まし。さらに、この作文が再読されたことによる展開として、作文集「いのち 宮古市立田老第一中学校津波体験作文集」(平成25年、岩手大学地域防災研究センター)や、森健編「つなみ 被災地の子どもの作文集 完全版」(平成24年、文藝春秋)が刊行されたことを紹介まし。

一方、石巻市、東松島市の関連資料の一つとして、吉村が、『漂流記の魅力』(平成15年、新潮新書)で取り上げた「太十郎の上着」(奥松島縄文村歴史資料館蔵)を展示まし【写真】。寛政5年(1793)、石巻

から江戸へ向かう途中で漂流した廻船・若宮丸乗組員の奥田太十郎は、ロシア領に漂着後、11年を経て、帰郷しました。吉村は、この上着を漂流民がロシアから持ち帰った唯一の衣服であるとして、傷みが激しいことを案じ、講演で保存を訴えまし。これを機に、平成17年、宮城県桃生郡鳴瀬町(現東松島市)の指定有形文化財となり、奥松島縄文村歴史資料館で保存され、東日本大震災発生時に太十郎の故郷(東松島市宮戸室浜)を襲った津波を免れまし。吉村の後世に資料を伝える真摯な姿勢を、大島幹雄氏(ノンフィクション作家・岩宮丸漂流民の会事務局長)に宛てた吉村の礼状(大島幹雄氏蔵)の記述をたどり、紹介まし。

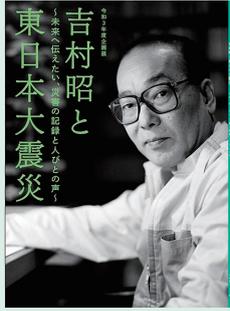
吉村昭のふるさと荒川区と、釜石市から
会期中、吉村昭の影響を最も受けたと語る荒川区出身のアニメーション作家、村田朋泰氏が、東日本大震災後に制作した人形アニメーションを、館内(常時)及び、上映会(令和3年10月30日)でご覧いただきました。併せて吉村昭をモデルとした人形のジオラマ作品「紅葉」も展示まし。

また、荒川区の中学生による「荒川区中学校防災部」の活動を紹介し、荒川区と交流のある釜石市で防災教育に取り組む菊池のどか氏(株)Kuratsu防災教育推進担当のメッセージや、瀬戸元氏(東日本大震災伝承語り部・大震災かまいたしの伝承者)が津波記念碑を調査した著作や資料なども展示まし。

吉村昭が伝えた防災と来場者の声
吉村は、『三陸海岸大津波』と『関東大震災』の執筆で得た防災の知見を生、生涯講演や随筆、テレビ番組で語りまし。

※この資料は、ゆいの森あらかわ3階「吉村昭関連作品」に配架されています。館内でご利用いただけます。

企画展図録のご案内



販売場所：ゆいの森1階・総合カウンター。
郵送販売も承ります。詳細はお問い合わせください。

取材ノートなどの展示資料や、吉村司氏をはじめ、10名の方の特別寄稿を収録しました。(B5・48ページ・オールカラー、420円)

《特別寄稿》吉村司氏、赤江珠緒氏、荒谷栄子氏(宮古市教育委員)、大島幹雄氏(ノンフィクション作家、若宮丸漂流氏の会事務局長)、佐伯一麦氏(小説家)、将基面誠氏(元若手県田野畑村村医)、鈴木るりか氏(高校生作家)、村田朋泰氏(アニメーション作家)、森健氏(ジャーナリスト)、ヤマザキマリ氏(漫画家、随筆家)。
《メッセージ》菊池のどか氏((株)8kurasu 防災教育推進担当)。

企画展公式サイトは常時公開



取材ノートなど展示資料(一部)を拡大してご覧いただけます。図録未収録の年譜や関連作品も掲載しています。

講演録や自筆メモを紹介し、平成7年、阪神淡路大震災発生時に出演した「視点・論点生かされない教訓」(NHK)を上映しました。吉村は、関東大震災の火災被害が拡大した教訓として、荷物を持たずに避難することや、道路確保の重要性を伝えていきます。

会期中は、東北地方で大震災を経験された方、防災活動に取り組まれている方、10代の若い世代の方など、多くの方々に来場いただきました。吉村は「津波は、自然現象である。ということとは、今後果てしなく反復されることを意味している」(『三陸海岸大津波』)と記しています。歳月を経て、災害の記憶が「日常に溶け込みつつある」ように感じるというお客様からは「改めて災害の怖さを実感し、出来ることをしなければ」と、心構えも大事だと思つた」との感想をいただきました。また、「後世に伝承すべき資料」、「人」が一番遠くまで伝わる強いメディアだと感じた」、「(吉村が)繋いでくれた先輩からの教訓を、しっかりと受け継いでゆかねばならぬと心を新たにしたい」などの感想が寄せられました。(学芸員 深見美希)

映像配信令和3年度企画展関連イベント 朗読とトーク 〜赤江珠緒が読む、吉村昭〜



吉村昭再現書齋(常設展示)で朗読する赤江珠緒氏。

ユーチューブで常時配信!!

出演：赤江珠緒氏
(フリーアナウンサー・ラジオパーソナリティ)
配信：ユーチューブ荒川区公式チャンネル
朗読作品：①吉村昭『梅の蕾』(『遠い幻影』平成12年 文春文庫)より。
②吉村昭『三陸海岸大津波』(平成16年 文春文庫)より。

吉村作品を愛読する赤江珠緒氏が、企画展に関連した吉村作品の朗読とトークの番組(57分)を制作しました。トークでは、東日本大震災発生時、陸前高田市を取材した赤江氏自身の経験や、災害の記憶を風化させないことの大切さなどを、『三陸海岸大津波』の記述にふれながら語っていただきました。また、防災とは想像力であるという視点から、日頃から起こり得る災害を意識することや、備えの大切さをお話しいただきました。

赤江氏は「漂流」「破獄」「平家物語」などの吉村作品を愛読されています。作品の魅力として、「容赦ない」徹底した取材・調査の基に「人間の生と死のギリギリの境界がフラットな目線で「淡々と」「克明に」描き出され、これが現実であり真実」なのだと思われ、強さを感じるとお話しになりました。朗読の感想や皆様へのメッセージも伺いました。ぜひ、ご視聴ください。

吉村昭『漂流記の魅力』ゆかりの地 〜「若宮丸」乗組員・奥田十郎の故郷、宮戸島(宮城県東松島市)から〜 奥松島縄文村歴史資料館のご紹介

「十郎の上着」(右6ページ参照)を所蔵する奥松島縄文村歴史資料館の菅原弘樹氏より寄稿いただきました。奥松島縄文村歴史資料館では、国史跡の里浜貝塚から出土した資料や、さまざまな活動を通して、海と共に生きた縄文人の知恵や暮らしを学ぶことができます。

奥松島縄文村歴史資料館について

菅原弘樹(奥松島縄文村歴史資料館館長)

奥松島縄文村歴史資料館は、大小260余りの島々と松が織りなす特別名勝松島の一角をなす、湾内最大の島・宮戸島にあります。史跡里浜貝塚に隣接する博物館です。島の小さな縄文博物館で、今秋開館から30年を迎えます。

里浜貝塚は、縄文時代前期から弥生時代中期にかけて、約五千年も続いた日本最大級の貝塚です。多数の縄文人骨や漁具・装身具などの多彩な骨角器が出土することで知られています。大正期にまで遡るこれまでの調査で、縄文人の生業・食生活の実態や精神文化など自然と向き合い・崇め・共生した、まさに縄文人のSDGsな暮らしぶりが明らかになってきました。

里浜貝塚には大きく「ぶ厚い貝層」が残されているだけではありません。「縄文人が見たまんまの海」が、貝や魚を獲り、塩づくりをした海が当時のままに残されています。森もあります。十郎もこの島で、縄文から変わらぬ海を見ていたことでしょう。

資料館では、この里浜の特徴を生かした体験講座やイベントを定期的開催しています。特に「地の利」を活かした海の縄文食体験や塩づくり、漁り体験などは、調査成果と縄文の海をもつ「里浜ならではの」体験メニューです。当館にはボランティアさんはいませんが、「村びと」がいます。体験イベントのリピーター家族を中心に発足したもので、現在、北は北海道から南は福岡まで178世帯532人が、縄文人が暮らした島で館の活動に様々な形で参画し、家族ぐるみで縄文を体験・体感しています。縄文人が暮らした島へ、ぜひお越しください。



奥松島縄文村歴史資料館
AOMORI JOMON VILLAGE

日本最大級の国史跡里浜貝塚(中央黄色枠内)と松島の風景。



貝層断面や出土資料など、見どころがいっぱいの展示室。



「村びと」と呼ばれる里浜貝塚ファンクラブ会員の皆さん。

〜読んでほしい吉村作品、この一冊〜

「やはり『三陸海岸大津波』です。明治・昭和の三陸津波と東日本大震災で目の当たりにした津波の脅威と惨状が重なります。昭和8年の津波で家族を失った荒谷氏夫妻の聞き取りから「津波は決して過去だけのものではないのだ」と綴られた言葉が心に残りました。震災から11年。改めて吉村先生が記した「津波」を読み、今回の津波を経験した者として、記録すること、そして伝えることの大切さを再認識いたしました。」(菅原弘樹)

【お問い合わせ】奥松島縄文村歴史資料館 宮城県東松島市宮戸字里81-18 電話0225-88-3927

〈「十郎の上着」展示期間は直接お問い合わせください。〉



今号の表紙 Vol.18

表紙の写真は昭和31年(1956年)頃、29歳前後に撮影されたものです。当時吉村は、繊維関係の会社に勤務しながら、丹羽文雄主宰の「文学者」や小田仁二郎主宰の「Z」に参加し、「青い骨」「無影燈」「昆虫家系」「白衣」などを発表(『青い骨』所収)、プライベートでは長男が誕生しました。ここから、昭和41年に「星への旅」で太宰治賞を受賞するまでの約10年間、同人雑誌や文芸雑誌に作品を発表しながら、小説家を目指してひたむきに歩み続けます。

今年度2回目の企画展「吉村昭没後15年 私の好きな……」では、この写真とともに吉村が転職に悩む親戚の青年に向けて送った言葉を紹介しました。一流企業に勤めて5年になる彼は、同業種の別企業に入社を誘われました。現在の会社に息苦しさを感じていたため、自由な活気に満ちているといわれる別企業に移って思う存分働きたい、という気持ちがありましたが、世話になった会社を辞めるのは申し訳ないと思い悩みます。そんな彼に吉村が送った言葉です。“人間は、自分を生かすために一生のうちに一度か二度は、そのような申し訳ないことをするものである。まだ若いのだから、自分に忠実に動くべきだ”(『占い師』『わたしの流儀』所収)。



企画展示室より
(※表紙の写真は津村節子氏蔵)

令和3年度企画展 「吉村昭没後15年 私の好きな……」の紹介

— 会期：2022年1月21日～3月21日 —

愛用品を通して吉村の創作姿勢や人となりを紹介する企画展を開催しました。企画展の特設サイトでは展示解説のほか、瀬戸内寂聴氏や担当編集者が吉村を語ったスペシャル映像などを常時公開しています。

企画展図録



◎金額 460円(税込)
◎サイズ B5・64ページ

企画展特設サイト

下記のQRコードまたは検索キーワードでアクセスいただけます。



吉村昭 没後15 好き 検索

※図録はゆいの森あらかわ1階総合カウンターまたは郵送によりご購入いただけます。特設サイトからもお申し込みいただけます。

編集後記

今号に掲載した2つの企画展では、館内を含むゆいの森あらかわ全体を回るカードラリーを開催しました。それぞれの企画展にちなんだ吉村氏のエピソードと、防災レシビやゆかりの地などを特集したカードを集めてくださる幅広い世代の方々を連日展示室でお見かけしました。ご参加ありがとうございました。

また、文学館へ足をお運びになることが難しいお客様にも展示をお楽しみいただきたいという思いから、今年度も企画展特設WEBサイトを制作しました。会期終了後もご覧いただけますので是非ご活用ください。

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により一部イベントに変更があり、楽しみにしていただいていた皆様には、ご迷惑をおかけいたしました。今後も、安心してご参加いただけるイベント開催を目指して参りますので、どうぞご理解ご協力のほどよろしくお願いいたします。

おかげさまで
大好評!

「吉村昭記念文学館友の会 会員募集」



吉村昭記念文学館では、友の会会員を募集しています。会員になると、限定グッズや各企画展の図録をプレゼントいたします。また、イベントの優先募集のご案内など、吉村昭ファンの皆様に向けてお得な情報もお届けします。是非、ご入会ください!

詳しくはHPを
チェック!



【会員区分】	
個人会員(1年)	1,000円
個人会員(3年)	2,500円
法人会員	3,000円
賛助会員	1口2,000円から

卓上カレンダーがもらえる!



吉村昭記念文学館ニュース 万年筆の旅 vol.18

令和4年3月24日発行

■ 編集・発行/荒川区 登録番号(03)0091号

■ 問合せ/吉村昭記念文学館

〒116-0002 東京都荒川区荒川2-50-1ゆいの森あらかわ内

TEL : 03-3891-4349

FAX : 03-3802-4350

URL : <https://www.yoshimurabungakukan.city.arakawa.tokyo.jp/>

【開館時間】9時30分～20時30分 【入館料】無料

※令和4年5月1日より9時～20時30分

【休館日】毎月第3木曜日・特別整理期間・保守点検日・年末年始他

アクセス

- ・都電荒川線(東京さくらトラム)「荒川二丁目(ゆいの森あらかわ前)」下車 … 徒歩1分
- ・東京メトロ千代田線「町屋駅」2番出口、京成線「町屋駅」下車 …………… 徒歩8分
- ・コミュニティバス「さくら」ゆいの森あらかわ下車(土曜、日曜、祝日のみ)
- ・東京駅から(地下連絡通路経由)東京メトロ千代田線「大手町駅」→「町屋駅」(乗車13分)

令和4年3月1日リニューアル!!